

標茶町立標茶小学校 フィールド学習 実施内容

《概要》

[日程] 2018年6月1日(金)

[参加者] 5年生児童48名

[講師・案内] 環境省 矢部自然保護官、渡辺自然保護官補佐
山本・安田(公益財団法人 北海道環境財団)

[フィールド学習の目的]

・体験活動を通して、湿原に関わりのある様々な環境、事象について関心と理解を深める。

[実施プログラムの概要]

9:40 達古武オートキャンプ場到着、オリエンテーション

9:55 苗畑および夢ヶ丘木道・展望地でのフィールド学習

12:45 フィールド学習終了

《実施内容(記録)》

■達古武オートキャンプ場到着、オリエンテーション(9:40)

○挨拶(環境省 矢部自然保護官)

釧路湿原は日本で1番大きな湿原。その湿原と周辺の森林を含めて国立公園に指定されている。私の仕事は国立公園を守る仕事をしている。今日は皆さんに湿原や周辺の森林についてのいろいろなお話をしたい。また、ここでは自然再生といって、ここにもともとある森に戻していく取り組みを行っているので、木の子どもを育てている場所も見てもらおう。お昼まで、組毎に分かれて活動をする。



■組毎に分かれて、苗畑および夢ヶ丘木道・展望地でのフィールド学習

【月組の活動】

■苗畑での学習(9:55)

○苗畑内で人工林と自然林の観察

正面上方の林と右側の林の違いを子どもたちに聞いてみる。(子どもから色と発言)正面の濃い緑色の森は1色。左右の森はいろいろな色がある。いろいろな緑色があるという事は、いろいろな木が生えているということ。(それぞれの林の写真を見せて違うところを見つけてもらう)同じ木が並んでいる正面の林は木の畑で木を育てている。何のために木を育てているの

だろうか。みんなが普段使っている紙や机、家などを作る材料にするために育てている。木が大きくなったら、伐って出荷し、これらの材料として使う。右側の森は自然のままの森で、いろいろな種類の木が生えている。どちらの林に生き物が沢山いるか確かめる為、鳥の鳴き声を聞いて鳥の声が良く聞こえると感じる方向を向いてもらう。



(子どもたちは左右の自然林の方向を向く) いろいろな植物が生えているという事は、いろいろな花が咲き、虫がやって来る。それを食べるに鳥や獣もやって来る。つまり様々な生き物が住む事が出来る。どちらも大切な森で、木の畑も私たちの生活にとっても大切なもの、自然の森も生き物が沢山いて大切な森。ここは釧路湿原国立公園といって沢山の生き物が暮らす自然を見守っている場所。その為、木の畑をゆっくりと自然の森へ戻していこうという取り組みをしている。

○苗畑の観察

木の畑から木を伐った後、そのままにしておくと雨が降った時に土がたくさん流れて釧路湿原に流れ出てしまう。この目の前の畑では、木の子ども(苗木)を育てて、山にある木の畑から木を伐った後に植えている。苗畑の苗木の高さを測ってみると26cm。自然の森の木は20mから30m程あり、この2歳の苗木が大きな森の木に育つには



30年程かかる。また、この苗木は買ってきたものではなく、南国や外国の木でもない。この森で拾った種から育てている。この森には、ここで育った木が1番合っており丈夫に育つ。これも一つ大事な事。釧路湿原では今、鹿がとても増えており、せっかく育てた苗が食べられない様に周囲を柵で囲っている。

■夢ヶ丘木道でのフィールド学習(10:15)

○木道入口でのオリエンテーション

木道に入る前に注意事項を伝える。1つめはイラクサに触らない事。軍手で触ってもチクチクする。2つめはスズメバチが飛んできた時の行動。飛んできたらしじっとしているかゆっくりとしゃがむ。最後にダニに刺されないように首にタオルを巻く事。湿原の中に入った後は班ごとにお互いにダニが体に付いていないか確認する。

○探してもらうお題を出しながら遊歩道を歩く

- ・大きな葉っぱを探す

大きな葉っぱを探してほしい。（大きなフキの葉を見つける）これはどんなところに生えるだろう。フキは少しジメジメしているような所に生えている。（ミズバショウの葉を見つける）これはミズバショウと言って、名前に水がついているが、その名の通り水が大好きで、湿原の中に多く生えている。その他、オオウバユリの葉などを見つける。



- ・水の音を探す

今度は目で探すのではなく耳を澄ませて水の音を探す。（水の流れを発見）この水はどこから来たか考えてみる。元々は雨で、山に降った雨が何日も何ヶ月も地面の中をゆっくり浸透していき、山の斜面からちよつとずつ出てくる。水が流れていく先にあるのは達古武湖で、この広い釧路湿原を潤す最初の一滴がここ。つまり森を守っていかなければ湿原も守れないということ。森と湿原は水でつながっている。

- ・鳥の音を探す

鳥の音を探すときは目を開けているよりも目をつぶって静かにしているとよく聞こえる。（立ち止まり30秒間目を閉じて鳥の音を聞く）どんな音が聞こえただろうか、何種類ぐらいいると思うか聞いてみる。エゾハルゼミ、センダイムシクイ、エゾムシクイ、アオジ、ウグイス、キビタキ等の音が聞こえた。（それぞれの鳥の写真を見ながら鳴き声を確認する）キビタキは、1年中釧路湿原にいる鳥では無くフィリピン、マレーシアなど東南アジアからはるばるやってきてここで卵を産み、子育てをしている。



- ・木に空いた穴を探す

（子ども達が次々に見つける）この木の穴を空けた鳥の正体はキツツキで、これはアカゲラと言うキツツキが空けたもの。標茶にも沢山いる。キツツキは、木に穴を空けて巣を作り、卵を産んで子どもを育てている。

- ・好きな色を探す

最前列を歩いていた生徒の好きな色「ピンク、エメラルドグリーン、黄色」をみんなで探す。（ピンクは、エゾノシモツケソウのつぼみを、エメラルドグリーンは芋虫、黄色はエンコウソウを発見）エンコウソウという名前の由来を紹介する。エンコウ（猿猴）とは手長猿という意味で、手長猿の様に長い茎を持っていることから名づけられた。

大小たくさん穴が開いた木を数本見つける。巣穴の大きさや形によって鳥の種類は異なり、これはアカゲラの巣。（巣穴への関心は高く、順番に指を入れるなど興味深く観察する）

休憩中に1人の児童が落ちていた木の皮を見つけ、虫の通った跡を皆で観察する。虫が木の皮の柔らかい所から食べて出て行った。木の皮を食べたミミズや芋虫のフンが土になる。木の皮も生き物にとっては大切な食べ物になっている。

○湧水の観察

湧水が染み出ている場所の近くまで行き、水が染み出している様子を観察する。水を触ると冷たいと歓声上がる。この水が流れて行き湿原を潤している。水の流れに沿って湿原の方へ向かうが、今日は特別に許可をもらって入る事を担任から説明する。児童それぞれが泥炭の感触を踏んで確認し、ミズバショウの大きな葉など湿地植物を近くで観察する。



○ヤチボウズの解説

ヤチボウス群落でヤチボウスについて解説する。長い髪ようになったスゲの葉の中や根には、虫が隠れ、それを狙ってサンショウウオやニホンザリガニ、エゾアカガエルなども身を潜めている。さらにそれを食べに、タンチョウなどもやって来る。



■夢ヶ丘展望台着（11：45）

目の前に広がるこの景色があるのは当たり前ではなく、いろいろな奇跡と努力が重なって残っている。今から50年ほど前、釧路湿原を工場や畑にする計画があった。その時に、釧路湿原はこのまま残しておくべきと反対をした人たちがいた。そこで大活躍したのがみんなの生まれた標茶町の人たちで、有名な人が2人いる。



1人は塘路湖のほとりに住んでいる漁師の土佐さん。達古武湖や釧路川にはイトウやシャケなど貴重な魚が住んでいるのでそのままにするべきだと訴えた。2人目はトンボの調査をした飯島さん。釧路湿原には貴重なトンボが絶対にいるはずだと、湿原に毎日入って調査し、日本で初めてイジマルリボシヤンマを発見した。このような努力の結果、この釧路湿原には貴重な生き物が住んでいる事が解り守られた。自分たちの町にこのような人たちがいる事をぜひ覚えていて欲しい。

■オートキャンプ場センターハウス到着・フィールド学習終了（12：45）

【雪組の活動（概要）】

月組みと同様の活動、解説を行いながら、最初に夢ヶ丘木道での活動を行った後、苗畑での活動を行った。雪組では、腐葉土と火山灰を透明な筒に入れて上から同量の水を加える透水実験を行った。腐葉土が水を吸収しやすいこと、下に流れ出る水が少なくなる（水を貯える）こと、ポタポタと長く水が垂れてくる（ゆっくりと水を通す）ことを確認した。また、この腐葉土は森の木々が落とした葉っぱが元になっていること、森の木々が根を張り巡らせて、雨が降っても土が流れださないようにしていることを解説し、こうした森の働きが豊かな湧き水を作り出していることを伝えた。

展望台では、湿原の回りは丘で囲まれていること、それらの丘から流れ出る水が湿原を潤していることを伝え、湿原を守っていくには、回りの丘にある森を守っていくことが大切であることを伝えた。

